オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(22)
－アナログ対ディジタル(7)－

１．始めに

前報(21)に引き続き、アナログ音源とディジタル音源の比較を行ってみます。

２．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7 の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はシューベルトのピアノ 5 重奏曲イ長調「鱒」に固定し、アナログ盤、CD、STAGE+から選択します。

アナログ盤

RVC　RVC-2125

タッシ・アンサンブル

ピーター・ゼルキン（ピアノ）、アイダ・カヴァフィアン、

フレッドシェリー、

ジョセフ・シルヴァーシュテイン、ブエル・ナイトリンガー

SASTRUPHON（日本コロンビア）　MS-1067-AX

マンハイムピアノ 5 重奏団

PHILIPS　X-7843

アルフレッド・ブレンデル（ピアノ）

クリーブランド弦楽四重奏団

CD

TRUE SOUND　TSC]2008

クリフォード・カーゾン（ピアノ）

ウイーン八重奏団

PHILIPS　PHCP-1464

アルフレッド・ブレンデル（ピアノ）

トーマス・ツエートマイヤー、タベア・チンマーマン、リジヤルト・ドウベン、

ペーター・リーゲルバイヤー

SONY　SRCR 2293

ジョス・ファン・インマゼル（フォルテピアノ）

ヴェラ・ベス、ユルゲン・クスマウル、アンナー・ビルスマ、

マージ・ダイロウ

STAGE+

シューベルト：ピアノ五重奏曲《ます》

2020 年 Schlosshotel Elmau

リサ・パティアシュベリ他

シューベルト：ピアノ五重奏曲《ます》 他

2017 年 ライヴ・アット・フェストシュピールハウス、バーデン・バーデン

アンネ=ゾフィー・ムター、 ダニール・トリフォノフ（ピアノ）、

ファ・ユン・イ、

マクシミリアン・ホルヌング、ロマン・パトコロ

シューベルト：ピアノ五重奏曲《ます》、弦楽四重奏曲第 14 番《死と乙女》

エミール・ギレリス（ピアノ）、 アマデウス弦楽四重奏団

３．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴結果

アナログ盤は LP-12、CD は EMT981、STAGE+は PC 経由で再生します。

タッシ・アンサンブルのアナログ盤は、ルドルフ・ゼルキンの息子のピーター・ゼルキンを中心とするグループです。録音年代は不明ですが、明るく生き生きとした切れのよい演奏です。

マンハイムピアノ 5 重奏団のアナログ盤は、録音年代は不明ですが、日本コロンビアの発売は 1970 年となっているので録音はそれ以前ということになります。ジャケットには RIAA 特性と記載されていますが、ZANDEN の資料では、SASTRUPHON レーベルは TELDEC の逆相となっており、聴き比べてみますと、ZANDEN の資料に従う方が音の芯が明瞭です。他の盤ではピアノが中央に定位しますが、この盤ではチェロとともに右側に位置します。以前に比べて音質は改善されていますが、コントラバスの音は明瞭さを欠きます。

ブレンデルとクリーブランド弦楽四重奏団のアナログ盤は、1977 年の録音で、この曲の定番と言われた演奏です。ブレンデルのピアノが前面に浮き出て躍動的に歌います。クリーブランド弦楽四重奏団は後方で控えめにブレンデルのピアノを支えるような演奏になっています。

カーゾンとウイーン八重奏団の CD は、日本橋の販売店の TRUE SOUND ブランドが元のアナログ盤から録音して CD 化したもので、ヒスノイズも入っています。録音やリマスターリングのプロセスは明らかになっていませんが、アナログ盤から録音して CD 化したことの音質の限界があるようです。しかしながら、カーゾンとウイーン八重奏団の演奏のレベルの高さは伝わってきます。

ブレンデルとその他のメンバーによる CD は、1994 年のディジタル録音です。ディジタル録音らしい明晰さで力強い演奏ではありますが、上記のブレンデルとクリーブランド弦楽四重奏団のアナログ盤に比べると、演奏の密度感は若干後れを取って

います。
インマゼルとその他のメンバーによるＣＤは、1997 年の録音で 19 世紀のフォルテピアノとストラディヴァリウスその他のオリジナル弦楽器の組み合わせによる演奏です。弦楽器はガット弦のようで、ノンヴィブラートで艶のある音での演奏となっており、フォルテピアノの響きとマッチしており、アナログ的な音で作曲当時の演奏を思わせるような CD です。
パティアシュベリその他のメンバーによる STAGE+は、最新の画像付き収録であり、小ホールでのライブ収録ですので、録音もよく、パティアシュベリのストラディヴァリウスエングルマンの音色、ピアノの響き、コントラバスの音階の明瞭さなど、ライブ感が満喫できます。このため、これまで仮想アースや LAN iSilencer などの評価にも使用してきました。改めて聴いてみますとアナログや CD にない演奏のリアルさが再現できています。
ムターその他のメンバーによる STAGE+は、2017 年のライブ録音です。録音が新しいだけあってクリアーな音でアップテンポの演奏が繰り広げられます。演奏は、ムター節とトリフォノフ節の対決のような丁々発止の演奏ですが、コントラバスの音が明瞭に下支えしています。
ギレリスとアマデウス弦楽四重奏団の STAGE+は、録音年代は不明ですが、ギレリスとアマデウス弦楽四重奏団の演奏ということからすれば、アナログマスター時代の録音と思われます。ギレリスと言えば、エネルギッシュなピアニズムの印象がありましたが、この演奏ではオーソドックスなアマデウス弦楽四重奏団の演奏に溶け込んで、ゆったりしたテンポの演奏で、ロマン派らしい抒情性のある音楽になっています。

４．まとめ

収録年代と音源の種類と再生ルートが異なる音源が、一様にスピーカーアキュライザー導入以降、音質が向上し、アナログや CD の古い音源もフレッシュな印象で聴けるようになっていますし、最新の STAGE+の音源もアナログに迫る音質で聴けるようになっています。アナログ盤と CD、CD と STAGE+などのペアーで聴き比べても音質が似通ってきています。

以上